

発明文化論

〈第94回〉

丸山 亮

花 火

夏の花火大会では国内随一の人気を誇る、長岡の花火を見てきた。信濃川の河川敷に何万人という人が集い、夜空を見つめ鮮やかな光模様が描かれるたびに歓声を上げる。スターマインや三尺玉の豪華な色彩に続いて、ドンという腹に響くような打ち上げ音が伝わってくる。川を横切る二つの橋には仕掛け花火があり、橋伝いに火の玉が横に移動したかと思うと、光の瀑布が川面に落ちていく。空には月が上がって、ときどき花火と重なって見えるのが面白い。

長岡の花火の起源は江戸時代、天保年間にさかのぼるといわれ、明治、大正、昭和と続いてきたが、戦争中は中断されていた。それが昭和20年8月1日の大空襲によって旧市街の8割が焦土と化し、千5百人近くの死者を出したことから、復興を祈念して翌昭和21年に再開されている。このため打ち上げられる花火は戦死者を悼むとともに、かつてこの地を襲った中越地震にも思いをはせるものだった。

8月はとくに、全国で様々な花火大会が催される。夏に楽しむのにふさわしく、終戦やお盆の季節とも重なるので、慰霊、復興、そして平和を祈るという意味を持たされて、各地で行われるに至ったのだろう。永井荷風に「花火」という随筆風の短編がある。作者はどこかで花火の音がするのを聞き、「今日は東京市欧州戦争講和記念祭の当日であることを思出した」。つまり第1次大戦の終結を祝う日で梅雨明けの近い、1919年7月1日のことから書き始める。「しかし路地の内は不思議なほど静かである。表通りに何か事あれば忽ちあっちこっちの格子戸の明く音と共に駆け出す下駄の音のするのに、今日に限って子供の騒ぐ声もせず近所の女房の話声も聞えない」といい、官製の祭りに住民がすぐに浮かれたわけではないことも書き記している。

花火は紀元前3世紀ごろ、中国で発明された火薬がやがて武器や狼煙として使われるようになっていったのが、歴史的にもっとも早い例のようだ。ヨーロッパでは中世のフィレンツェで、祝祭的な意味での使用が始まっている。テレビの紀行番組を見ていたら、そのフィレンツェの復活祭の出し物が紹介された。広場に置かれた山車に向かい、百メートルほどの距離から作り物の鳩が火種をくわえ、ワイヤー沿いに飛んでいく。そして山車に仕組まれた火薬に点火すると、出発点まで戻っていき、山車は激しい爆音を轟かせるという仕掛けで、多くの人とその巧みな進行を見て、喝采していた。

蔡國強という中国出身の現代アーティストがいる。火薬や花火を使った絵画とパフォーマンスで知られ、2008年の北京オリンピックでは、開会式や閉会式で花火のパフォーマンスをしている。キャンバスの表面で火薬を爆発させて絵画的な表現を行うものでは、作品が生まれる過程が見ものだ。いま横浜美術館では彼の「帰去来」と題した個展が開かれていて、テレビのインタビューを受けた蔡は、自身にも予期できない、毎回異なった結果が生まれるところがおもしろいと答えている。

各地の花火大会のニュースが流れてくる8月12日、中国の天津で大規模な爆発事故が起きた。数キロ離れたところまで建物や自動車を焼きつくし、火災は宇宙から人口衛星でも観測されている。死者、行方不明あわせて200人近くに上る大惨事となった。火災の通報を受けた消防隊が現場に駆けつけて放水したところ、倉庫にあった硝酸アンモニウムや硝酸カリウムなど、水と接触すると激しく反応して引火する物質にまで水をかけてしまったという。これらの化学物質は、火薬や花火の原料になるものだ。中国は数千年前に発明した火薬で、自らの首を絞めたのである。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)